

もったいない町民大会 2011

1月21日(土) 中泊町総合文化センター「パルナス」

今年度の「もったいない町民大会」が、1月21日(土)パルナスで行われました。

5回目の開催となる大会では、町環境整備課古川係長の「リサイクルとゴミ減量について」の発表、町水産観光課藤田課長補佐による「美しい海岸線を守る清掃活動報告」、薄市小4年生の発表「ごみダイエット作戦」、そしてアルピニスト野口健氏による「富士山から日本を変える」と題した講演が行われました。

01 「リサイクルとゴミ減量について」 町環境整備課 古川係長

燃やせるごみ、燃やせないごみの処理方法から始まり、町から出たごみの総量、ごみ処理に要する費用などが紹介されました。

特にごみ処理の費用には関心が高く、自分たちが出したごみにいくら使われているのか、参加者は興味深げに聞いていました。

そのほか、リサイクル率の推移や、リサイクル品を町内会などで回収する「集団回収」を説明し、最後にごみ減量のキャッチフレーズ「3R(リデュース、リユース、リサイクル)」を紹介しました。



02 「美しい海岸線を守る清掃活動報告」 町水産観光課 藤田課長補佐

小泊地域の大事な資源である「海岸線」。これを守るためにどんな活動が行われているのか、4つの活動を報告しました。

紹介されたのは、こどもクリーンアップ作戦、「小泊海岸を守る会」の清掃活動、海岸漂着物の回収処理、海岸漂着木の回収処理の4事業。特に漂着木の回収処理では、座礁船「ヘレナII」の木材が海岸に散乱している写真が紹介され、事業実施前と後のあまりの違いに、会場からは驚きの声が上がっていました。

03 「ごみダイエット作戦」 薄市小4年生のみなさん

薄市小4年生は、年間を通してごみ問題の学習に取り組んでおり、その成果を今回発表しました。

発表に立った子どもたち11人は、さまざまな製品についているリサイクルマークに着目。大人でも意外と知らないマークの解説を、わかりやすく演劇風に発表し、会場の大人たちも感心していました。

さらに、それらのリサイクル方法や、むだを出さないための心がけ、物を大切に使うための方法なども大きな声で演じ、観衆からはその都度拍手や歓声が上がっていました。

最後は、これからも「ごみダイエット作戦」に取り組んでいくことを高らかに宣言。大人たちの見直すべき生活を、子どもたちに改めて教えられた発表でした。



「富士山から日本を変える」



といいます。

そんなこともあり、エベレストの清掃活動を決意。野口氏いわく「売られたケンカを買っただけ」と茶化していましたが、これが環境保護活動を始めるきっかけとなったようです。

屈辱的な発言をされた富士山にも行ってみた野口氏。登山家である同氏は、雪に包まれた冬の美しい富士山をイメージしていましたが、夏に青木ヶ原樹海を訪れたとき、不法投棄されたおびただしい数の産業廃棄物に、愕然としました。以来、市町村のほか環境省にも掛け合い、毎年富士山の清掃活動を行っているそうです。

最後に野口氏は、講演の締めくくりとして「環境問題の相手は、自然ではなく、人間社会」と言いました。世の中にはさまざまな意見があり、それらを調整する難しさを身をもって体験した野口氏。自ら先頭に立って活動する同氏の話に、聴衆は深く聞き入り、講演後はひととき大きな拍手がわき起こっていました。

世界の名だたる山々を、若くして制覇した登山家 野口健氏。環境活動にも熱心なその野口氏が町に来るとあって、講演には町内のみならず、町外からの参加者も訪れました。

小走りで舞台上に現れた野口氏は、軽妙な語り口で自らの生い立ちから話し始めました。そのほか、登山の際の心境、山頂で感じることなどを語り、今回のテーマである「富士山」のことに言及しました。

野口氏は、外国人たちと一緒にエベレストを登っていた際、ある人からキャンプ内で「エベレストを汚すのはお前たち日本人だ」と言われたそうです。その際に「世界で一番汚い山は日本のフジヤマだ」とも言われ、自分個人ではなく日本全体を否定する発言に屈辱を覚え、非常に悔しかった

野口健氏に聞きました

Interview



一町のこのような取り組み(もったいない運動)をどう思いますか？ また「こうしたらいい」というアイデアがあったら教えてください。

いつか関心が盛り上がりつつも、それを持続するのは本当に難しい。とにかくやり続けることが大事。それには、行政だけがやるのではなく、住民を巻き込んで、環を広げることだと思います。

—野口さんが日頃「もったいない」と思っていることは何ですか？

若い人と話をしたりする機会があるのですが、聞いていると失敗したらどうしようとか、マイナス思考の人が多。これは「もったいない」と思います。いろんなチャンスがあるのにね。若い人には、自分の可能性にチャレンジして欲しいと思いますね。

—「もったいない町民運動」を進める町民に対して、野口さんからメッセージをお願いします。

この問題は、地元が本気にならないとダメです。「自分たちのところは自分たちで守る」という、この意識がないとうまくいかない。日本三大霊峰の中に「白山」というのがありますが、そこを登山すると「ようこそ」と声をかけられるんです。聞けば、登山者の約6割が地元の人だそうで、私たちの白山に「ようこそ」ということだったんですね。そこでは、たとえ外から来た登山者がごみを捨てても、6割もいる地元の人がすぐさま拾って山を守っている。こういったことが、自分たちのふるさとを守ることにもつながるので、町民の方にもそういう意識を持って運動を進めてほしいと思います。

短い時間でのインタビューでしたが、こちらの質問に熱っぽく語ってくれた野口さん。このほかにも、官民の連携の重要性や、白神山地のマタギについてなど、時間が許す限り語ってくれました。野口さんの話は示唆に富んでいて、こちらを引き込んでいく不思議な魅力があるように思いました。野口さん、本当にありがとうございました。



【たくさんの買い物客が訪れるフリーマーケット】

■さまざまな取り組みが行われました

条例制定を機に、町ではいろいろな取り組みを行いました。たとえば、

●もったいない町民運動推進会議

平成18年に条例を制定し、丸5年を迎えた“もったいない条例”。大量生産・大量消費社会が、地球環境にとって悪い影響をもたらすことを反省し、資源を大事にする循環型社会を目指して制定された条例ですが、この5年間で私たちの“もったいない運動”はどのように展開されてきたのでしょうか。

の創設

●子どもたちへの環境教育・学習

●EM菌の利用

●フリーマーケット開催

●もったいない町民大会の開催

など、行政だけでなく、さまざまな人たちが、いろんな面から取り組みを行ってきました。

このほか、最近では小泊中がリサイクル品を集めて車いすを寄贈したり、集落や団体がリサイクル品を回収・売却したりなど、この5年間の取り組みは、把握しているだけでも多岐にわたっています。

条例制定から5年

Special Feature

“もったいない”

はどこまで進んだのか？

リサイクル品の収集量(H17~H22)

単位：トン(t)

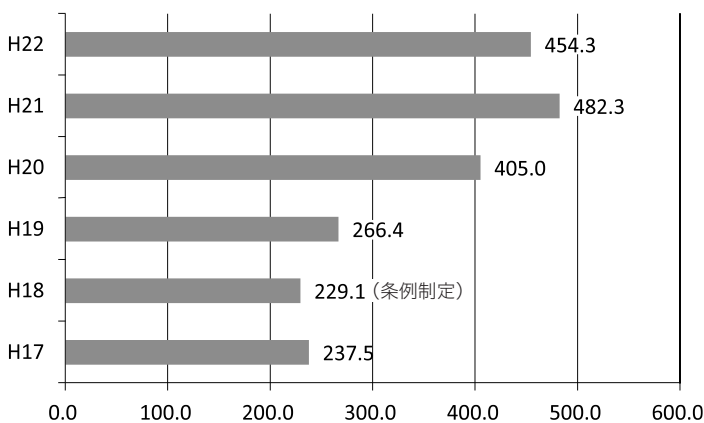


表1 リサイクル率の推移(H17~H22)

H17	5.3%	H20	11.8%
H18	5.7%	H21	13.3%
H19	7.2%	H22	12.4%

H21は、中里処分場延命措置で金物などをリサイクルしたため、一時的に上昇しています。

■リサイクルも進みました

条例制定前、町は県内でもあまりリサイクルが進んでいなかった方で、一方、廃棄物最終処分場の埋め立て容量が限界に近づくなど、ごみ処理問題が町に大きく影を落としていました。

しかし、条例制定後、町民の皆さんの意識は明らかに変わりました。左のグラフは、リサイクル品の収集量です。ご覧のとおり、明らかに収集量が増え、皆さんの心の中に“もったいない”という意識が根付いていると感じられます。ごみの分別が細分化され、いくらか皆さんの生活にはご不便をおかけしたと思いますが、このように成果が現れてきています。

取り組みの結果、表1のとおり町のリサイクル率は急上昇しました。現在の町のリサイクル率は、県内40市町村中15位(平成21年度)で、もはや下位ではありません。

集団回収

平成20年5月から、地区の団体などを対象に始められた集団回収。これは、地区が独自にリサイクル品を回収し、それを業者に売り渡す取り組みです。現在、9団体が取り組んでいます。

売却金は、集団回収団体の運営費に充てられるなどして、地区にお金が入り、ごみも減るといふ、一石二鳥の取り組みです。



【上高根地区の集団回収】

ストックヤード

中里地域に8か所、小泊地域に2か所設置している、リサイクル品の収集小屋です。条例制定以降、徐々に数を増やしてきたこともあり、回収量もそれに合わせて年々増えてきました。

ストックヤードに収集されたリサイクル品は、回収業者が収集し、品目に応じてさまざまな材料・製品に生まれ変わります。



【中里地区ストックヤード】

■**ごみ減量に大きく貢献した取り組み**
 このように大きな成果が現れたごみ減量への取り組み。その中でも、とりわけ効果が大きかったのは、ストックヤードの設置と集団回収の広まりです。

このような取り組みのおかげで、

●リサイクル率向上

リサイクル品を回収すれば、再び資源として利用できます。限りある資源の有効活用につながります。

●ごみ最終処分場の延命

リサイクルしなければ、ただのごみ。昨年、新しい処分場を起工しましたが、リサイクルすれば運ばれるごみも減り、多額の建設費がかかる最終処分場をより長く使えます。

皆さんの取り組みによって、“もったいない運動”はここまでできました。
 この取り組みをさらに進めるためには、皆さんのご協力が必要です。今一度、皆さんの生活を見つめ直し、もったいない運動の推進にご協力をお願いいたします。
●生ごみの水切りを忘れずに
 重さで負担が増える燃えるごみは、生ごみの水切りが有効です。重さが減れば、負担は少なくなります。

表2 燃えるごみの搬入量

	単位：トン(t)
H17	2,819
H18	2,647
H19	2,479
H20	2,264
H21	2,296
H22	2,349

※事業系ごみは除く

■燃えるごみは横ばいという課題も

リサイクル率向上という大きな成果を手にしたもったいない運動。しかし、課題もあります。

表2は、燃えるごみの回収量を表したものです。条例制定でぐっと減りましたが、最近ほむしろ若干増える傾向にあります。燃えるごみは、つがる市稲垣町にある西部クリーンセンターに運ばれています。重量に応じて町が負担金を出しています。西部クリーンセンターへの負担金は、10kgあたり約85円で、平成22年度には1,965万円負担しています。つまり燃えるごみは、重ければ重いほど、お金がかかっていく計算になります。また、最近ではリサイクル率も横ばい傾向で、一層の運動推進が求められています。

これからもご協力ください

●**雑誌や新聞などをリサイクルへ**
 紙類も意外に重く、リサイクルすれば燃えるごみ減量につながります。ストックヤードにぜひ運んでほしい品目です。
●ごみを出さない努力も大切
 ごみを出せば、分別する手間も増えます。食べ残しが出ない買い物をするなど、ごみ自体をあまり出さないようにすることも大切です。